東京大學

東洋文化研究所

要　覧　昭和61年度

東京大学東洋文化研究所
6413042844

INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE

UNIVERSITY OF TOKYO

1986

C3
45
9

東洋文化研究所要覧

目　次

Ⅰ　沿　　革…… 1
Ⅱ　組　　織…… 3
Ⅲ　職　　員…… 5
Ⅳ　研究活動…… 9
　A　部門研究…… 9
　B　昭和 61 年度研究計画 …… 21
　C　定例研究会…… 33
　D　科学研究費による研究・特別事業費による現地研究… 37
　E　本学内教育参加 …… 41
　F　外国出張 …… 46
　G　外国人研究員等・内地研究員・奨励研究員 …… 51
　H　研究報告…… 53
　I　個人研究業績…… 58
　J　図　　書…… 79
　K　資　　料…… 82
Ⅴ　東洋学文献センター…… 85
〔付〕住　所　録…… 90
　建物配置図……100

I 沿　　革

本研究所は昭和16年11月26日，東洋文化の総合的研究を目的として，東京（帝国）大学に付置創設された。当初は哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で，総合図書館内に研究室，書庫，事務室を置いて発足した。昭和24年，新たに3部門が増設されたのを機会に組織を細分化し，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し，これまでの総合図書館内研究室を分室とし，研究の発展をはかった。

ついで昭和26年，人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが，アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するに伴い，地域区分を軸とした将来計画のもとで，従来の諸科学の専門体系による部門構成を，汎アジア経済部門，汎アジア人文地理学部門，汎アジア文化人類学部門，東アジア政治・法律部門，東アジア歴史部門，東アジア美術史・考古学部門，東アジア哲学・宗教部門，東アジア文学部門の8部門に再編成し，さらに地域部門の増設計画を立てた。そして昭和35年には南アジア政治・経済部門，昭和39年には東北アジア部門，昭和43年には西アジア歴史・文化部門，昭和48年には東南アジア経済・社会部門，昭和53年には西アジア政治・経済部門が増設されて，ようやく13部門を擁するに至った。

なお昭和41年には，東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サーヴィスを目的として，東洋学文

献センターが付属施設として設置された。

本研究所の研究者は各々の専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進めながら，しかし各専門分野の孤立を避け，アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために，合同の研究会，各種研究班によって学際的研究を育て，また研究陣容の補強を図るため，学内外の専門研究者に研究を委嘱し，協力を求める方針をとってきた。

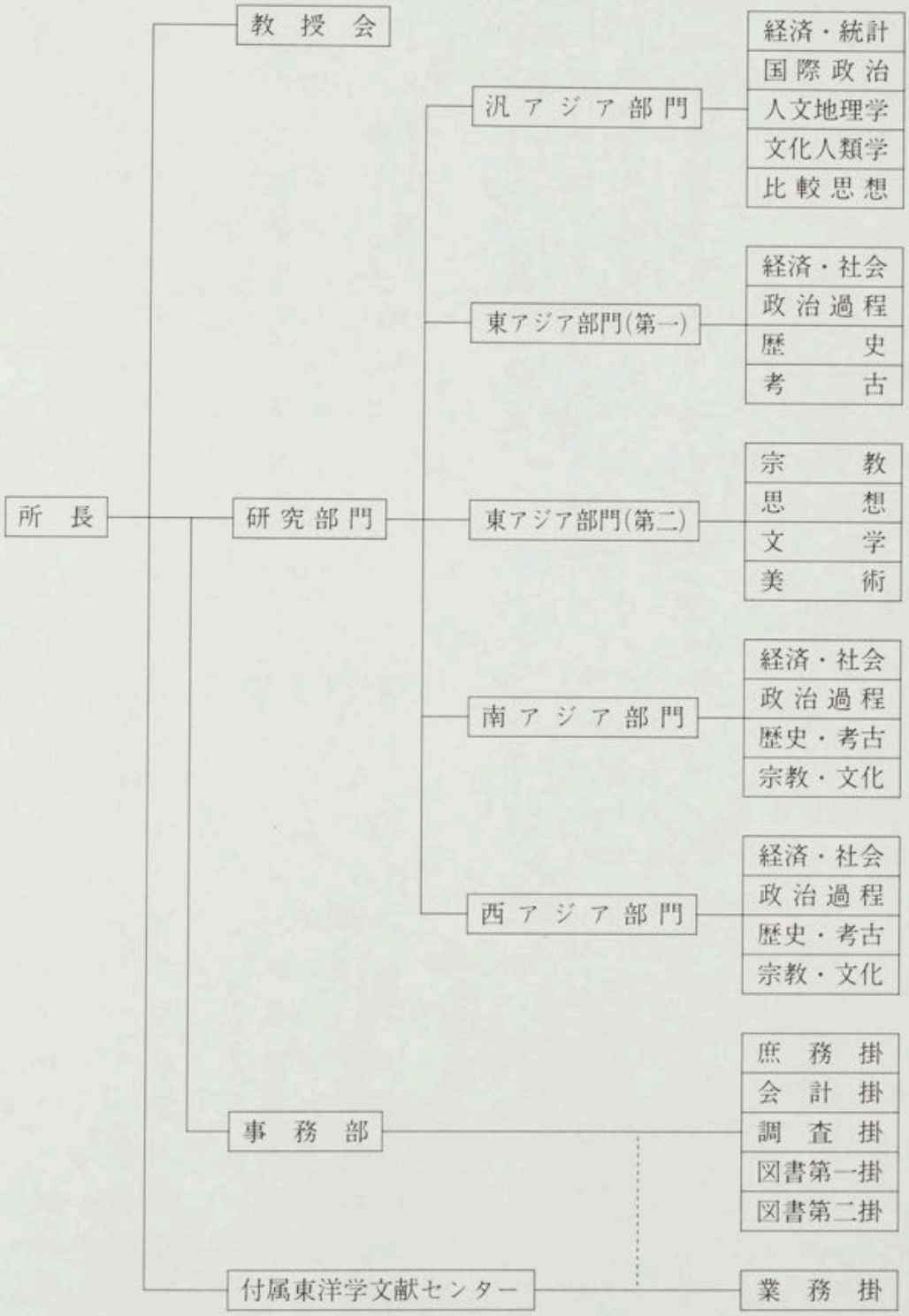
しかしながら，アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日，本研究所が，わが国のアジア研究の中枢的，指導的役割を果たすために，研究内容の充実，規模の拡大を含む組織上の再編成を行なうことが必要となった。そこで，昭和56年より新しい構想にもとづくいわゆる大部門制を採用し，これまでの13部門を，汎アジア部門，東アジア部門，南アジア部門，西アジア部門の4部門に統合し再出発することになった。

創立以来23年間にわたって，本研究所は総合図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが，昭和39年に，本郷構内に建物を新築する計画が具体化した。昭和39年から昭和42年にかけて工事が行なわれて総合研究資料館との合同庁舎が完成し，5階以上を本研究所が使用することになった。

しかし，研究組織の拡充，研究活動の多様化，図書・資料の増加などに伴い，狭隘な施設の改善，とくに書庫の緊急整備等の強い要望があり，昭和52年から施設整備の必要性を強調してきた。昭和57年に至ってこれが認められ，総合研究資料館との交換分合により，本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これに伴って全面的に改修工事を行ない，昭和59年3月に工事が完了した。

本研究所の総面積は6,577平方メートルで，地下1階，地上8階からなる。3階までを所長室，事務室，図書室，東洋学文献センター，会議室，演習室等とし，4階以上は各研究部門の研究室である。なお地階から8階まで（2階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。

Ⅱ 組　　織


所　長
教　授　会
研究部門
汎アジア部門
経済・統計
国際政治
人文地理学
文化人類学
比較思想
東アジア部門(第一)
経済・社会
政治過程
歴　史
考　古
東アジア部門(第二)
宗　教
思　想
文　学
美　術
南アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
西アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
事　務　部
庶　務　掛
会　計　掛
調　査　掛
図書第一掛
図書第二掛
付属東洋学文献センター
業　務　掛

Ⅱ 組　　織

歴代所長

氏　名	在　職　期　間
桑田　芳蔵	昭和16.11.26—18. 3.31
宇野　円空	18. 4. 1—21.10. 5
戸田　貞三	21.10. 6—22. 9.30
辻　直四郎	22.10. 1—29. 3.31
仁井田　陞	29. 4. 1—33. 7.10
飯塚　浩二	33. 7.11—35. 7. 9
結城　令聞	35. 7.10—37. 7. 9
江上　波夫	37. 7.10—39. 7. 9
飯塚　浩二	39. 7.10—40. 2.28
小口　偉一	40. 3. 1—41. 3.31
川野　重任	41. 4. 1—43. 3.31
小口　偉一	43. 4. 1—45. 3.31
泉　靖一	45. 4. 1—45.11.15
川野　重任（事務取扱）	45.11.16—45.12.17
鈴木　敬	45.12.18—47. 3.31
荒　松雄	47. 4. 1—48. 3.31
窪　徳忠	48. 4. 1—49. 3.31
佐伯　有一	49. 4. 1—51. 3.31
大野　盛雄	51. 4. 1—53. 3.31
深井　晋司	53. 4. 1—55. 3.31
中根　千枝	55. 4. 1—57. 3.31
大野　盛雄	57. 4. 1—59. 3.31
尾上　兼英	59. 4. 1—61. 3.31
山崎　利男	61. 4. 1—現在

名誉教授

氏　名	称号授与年月
米澤　嘉圃	昭和42.5
江上　波夫	42.5
小口　偉一	45.5
橋本　秀一	45.5
川野　重任	47.5
窪　徳忠	49.5
鈴木　敬	56.5
荒　松雄	57.5
佐伯　有一	58.5
大野　盛雄	60.5

歴代事務長

氏　名	在　職　期　間
山高　力三	昭和16.11.27—17. 9.30
根本　喜蔵	17.10. 1—19. 7. 9
長内太郎吉	19. 7.10—29. 7.15
工藤松之助	29. 7.16—38.10.31
宮本　健	38.11. 1—44. 2.28
新井　康次	44. 3. 1—49. 3.31
斎藤　益	49. 4. 1—52. 6.30
三浦　晧守	52. 7. 1—56. 3.31
伊東秀三郎	56. 4. 1—58. 3.31
岡部　藤男	58. 4. 1—61. 3.31
木内　義一	61. 4. 1—現在

Ⅲ 職　　員

所長　山崎利男

汎アジア部門

山田三郎	教授	(707室)
原　洋之介	助教授	(611室)
関　寛治	教授	(702室)
猪口　孝	助教授	(810室)
友杉　孝	教授	(703室)
中根千枝	教授	(712室)
関本照夫	助教授	(808室)
川崎有三	助手	(709室)

東アジア部門（第一）

斯波義信	教授	(403室)
濱下武志	助教授	(411室)
久保　亨	助手	(413室)
池田　温	教授	(402室)
宮嶌博史	助教授	(410室)
上田　信	助手	(513室)
松丸道雄	教授	(407室)
谷　豊信	助手	(412室)

Ⅲ 職　　員

東アジア部門（第二）

鎌田茂雄	教授	(502室)
蜂屋邦夫	助教授	(508室)
吉田　純	助手	(812室)
尾上兼英	教授	(503室)
田仲一成	教授	(511室)
大木　康	助手	(708室)
戸田禎佑	教授	(507室)

南アジア部門

松井　透	教授	(607室)
加納啓良	助教授	(608室)
土佐弘之	助手	(613室)
山崎利男	教授	(603室)
柳澤　悠	助教授	(610室)
竹中千春	助手	(612室)
上村勝彦	助教授	(602室)

西アジア部門

板垣雄三	教授	(811室)
鈴木　董	助教授	(803室)
松谷敏雄	教授	(807室)
鎌田　繁	助教授	(802室)

事務部

事務長　木内義一

総務主任　浅野壽男

庶務掛

掛長　道鎮正雄

事務官　益子一郎

〃　安富　博

用務員　林　八重子

会計掛

掛長　高橋長五郎

主任　岡　徹

事務官　高野哲郎

〃　瀬見千恵子

技官　丸山　勉

調査掛

主　任　木村源蔵

事務官　結城剛吉

図書第一掛

掛　長　中村隆治

事務官　芳賀満子

〃　新居弥生

〃　吉澤秀彦

図書第二掛

掛　長　松山靖夫

事務官　長野　真

〃　笠井伊里

〃　山口　淳

イラク・イラン遺跡調査室

技　官　古山　学

〃　千代延恵正

東洋学文献センター

センター長(併)

山崎利男

センター主任(併)

松丸道雄

助　手　山之内正彦

業務掛長　中里富三男

事務官　畦浦美矢子

〃　神田百合枝

〃　渋谷義治

〔職員数〕（昭和61年4月1日現在）

教　授	15名	助教授	11名	助　手	9名
研究担当	25名	研究協力	99名		
事務官	23名	技　官	3名	用務員	1名

〔昭和59・60・61年度当初　教職員の異動等〕

（教官）

昭和 59. 4. 1	教　授	尾上兼英	所長に併任
59. 4. 1	助　手（文学部）	谷　豊信	東アジア部門（第一）に配置換
59. 4. 1		竹中千春	助手（南アジア部門）に採用
59. 9. 1		鎌田　繁	助教授（西アジア部門）に採用
59. 12. 1	助教授	松谷敏雄	教授（西アジア部門）に昇任

Ⅲ 職　　員

昭和 60. 2. 7	教　授	深井晋司	死亡退職（西アジア部門）
60. 3.31	教　授	大野盛雄	停年退職（西アジア部門）
60. 3.31	助　手	加藤　博	退職（東洋大学講師）
60. 4. 1		関本照夫	助教授（汎アジア部門）併任
60. 4. 1	助　手	清水　展	九州大学助教授に昇任
60. 4. 1		土佐弘之	助手（南アジア部門）に採用
60. 4. 1		吉田　純	助手（東アジア部門（第二））に採用
60. 5.21	元教授	大野盛雄	名誉教授の称号授与
60. 7. 1	助　手	福井清一	岡山大学助教授に昇任
61. 4. 1	教　授	山崎利男	所長に併任
61. 4. 1		斯波義信	教授（東アジア部門（第一））に配置換
61. 4. 1		板垣雄三	教授（西アジア部門）に配置換
61. 4. 1		上村勝彦	助教授（南アジア部門）に採用
61. 4. 1		関本照夫	助教授（汎アジア部門）併任
61. 4. 1		大木　康	助手（東アジア部門（第二））に採用

（職員）

昭和 59. 4. 1	庶務掛長	小杉雄二	工学部総務課人事掛長に配置換
59. 4. 1	新聞研究所庶務掛長	道鎮正雄	庶務掛長に配置換
59. 6.30	図書掛	中村摩利子	退職
59. 8.16	会計掛	山本日出夫	文部省学術国際局国際学術課に転任
59.10. 1	総務主任	中屋俊一	物性研究所会計主任に配転換
59.10.16	人事課	瀬見千恵子	会計掛に配置換
59.11. 1	図書館総務主任	土居喜公	総務主任に配置換
60. 4. 1	図書掛	工藤一郎	教養学部図書館整理掛長に昇任
60. 7.31	庶務掛	大熊明子	辞職
60. 9.25		山口　淳	図書第二掛に採用
61. 4. 1	事務長	岡部藤男	農学部事務長に配置換
61. 4. 1	原子力研究総合センター事務長	木内義一	事務長に配置換
61. 4. 1	総務主任	土居喜公	理学部事務長補佐に昇任
61. 4. 1	教育用計算機センター事務主任	浅野壽男	総務主任に配置換
61. 4. 1	会計掛	吉田　正	医学部附属病院管理課給与掛主任に昇任
61. 4. 1	宇宙科学研究所契約課	高野哲郎	会計掛に転任
61. 4. 1	調査掛	木村源蔵	調査掛主任に昇任

Ⅳ　研究活動

A　部門研究

汎アジア部門

中根千枝　関本照夫　川崎有三　山田三郎
原洋之介　関　寛治　猪口　孝　友杉　孝

汎アジア部門は，「アジア諸地域における社会・文化の変容過程」という研究課題のもとに，アジア諸地域の社会，政治，経済，文化に関する理論的・実証的研究をおこなっている。本部門の特徴のひとつは，他の部門が一定の地域を研究対象とするのに対して，本部門では文化人類学，政治学，経済学，人文地理学という社会科学の個別専門分野の理論と方法にも深くかかわっていることである。また，専門分野によっては日本も重要な研究対象にふくまれている。

文化人類学研究分野は，アジア諸地域の社会・文化を対象とし，異なる社会構造を比較分析することに主眼をおいている。

中根は，開発途上国問題をふくめてアジア諸社会を深く理解しうる社会科学の構築にむけての理論的研究をすすめている。特定地域の研究としてはインドを中心とした実態調査にもとづく研究につづき，文献資料と実態調査を合せ用いて中国のチベット系少数民族と漢民族の複合社会ならびにチベット

社会の研究をおこなっている。

関本は，インドネシアでの現地調査をふまえて，農村から国家にいたる諸段階での儀礼の研究をおこない，かつそれをふまえてインドネシア社会の統合に関する理論構築を試みている。

川崎は，以前に実施したマレーシアの潮州人漁村での調査にもとづき，東南アジアにおける漢人の村落の政治形態，儀礼，親族組織などに関して新しい分析方法を探究している。

経済・統計研究分野は，アジア諸国の経済発展・農業発展の実証的な比較研究をおこなっており，この研究を通じて，欧米で提起・展開された経済発展論に替わりうるアジア社会に適した経済発展論もしくは農業発展論の構築を模索している。班研究としておこなってきたアジア諸国における農村開発の研究は，タイでの現地調査報告の完成で一応おえ，現在は農村における工業化の問題にとりくんでいる。それと共に，アジア諸国経済・社会に関する基本的統計の集録と検討をおこなっている。

山田はアジア諸国経済発展の比較分析をおこなっているが，とくに農業発展に関し，アジア諸国の生産性・生産構造の変化の実証分析をおこない，ヨーロッパその他の農業発展との対比のなかで，国際的視野からアジアの経済発展，とくに農業発展についての分析を進めている。

原は研究対象として東南アジアに重点をおいて，市場経済化が対象地域に固有の社会構造といかに接合できるかという問題に焦点をおきながら，この地域に固有の経済発展の型がありうるかどうかについて模索している。さらに，東南アジアの経済発展を国際経済の動態のなかに位置づけるという国際経済学的研究をおこなっている。

国際政治研究分野は，アジア諸国及び環太平洋諸国における政治変動と，それらの変動を内にかかえたアジア諸国間の国際関係の動きとの双方を，国際政治学・比較政治学の視点から明らかにすることを目標としている。この研究では，アメリカ・ソ連といったアジア地域外の国の分析はいうまでもな

く，日米中ソ関係のような地球的規模の国際秩序の動的要因の解明も不可欠である。世界全体の国際関係の構造と過程の理解をまって，はじめてアジア地域の国際関係の動態がより鮮明に分析できるという視角から，研究の対象を引き続き拡大させつつある。

関は世界全体での国際関係の展開の分析を通じて，アジア環太平洋地域での「平和」を維持しうる国際関係の構造的・過程的特徴を明らかにする研究をおこなっている。とくに世界の軍事化とそれを阻止する新しい発展の条件について，日本経済の地球大の下でのアジア諸国の実態の変容に即した規範的パラダイムのネットワークの型を解明することに努めている。

猪口は世界政治経済の基本的構造過程の分析に従事し，アジア地域の国際関係との関連で日本の政治経済の構図を分析している。同時に，比較政治学の新動向を積極的にとり入れて，東アジア・東南アジア諸国の政治体制の比較研究を共同研究の形ですすめている。

人文地理学研究分野は，対象地域への長期間の住込み調査を通して，アジア諸地域の農村社会あるいは都市社会を全体的に把握する研究を課題とする。この研究では，社会科学の諸理論を安易に適用するのではなく，既存の社会科学の活性化を目指して実態調査の成果を意味づける方向を模索している。それと同時に，比較分析の視点もとり入れて，アジア社会を参照枠組にして，日本社会について再考することを意図している。

友杉はタイ農村社会の調査をおこない，社会を全体として把えようと試みた。経済的なものと非経済的なものとの関係性を分析し，ノモス，カオス，コスモスの3要素相互関連としてモデル化した。さらに，最近はスリランカ地方都市社会の研究に重点をおいている。この研究では，象徴の解釈を媒介として，社会の過去の出来事を現在そこに生きている記憶として，人文地理学の記述の中に再現することに努めている。

Ⅳ 研 究 活 動

東アジア部門（第一）

松丸道雄　谷　豊信　池田　温　斯波義信
上田　信　濱下武志　久保　亨　宮嶌博史

東アジア第一部門は，中国，朝鮮，日本，ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ，社会科学，歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を適確に把握することを目標とする。この研究では，とくに東アジア第二部門と協力して，学際的な地域研究による生きた全体像の把握をめざすことはいうまでもない。研究分野としては，経済，社会，政治，歴史，考古を包含し，「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として，共同研究を継続している。この部門では，「殷周時代の文物とその社会構造」「東アジア前近代官僚制の研究」「17 世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」「朝鮮における社会変動と民衆」の 4 つの研究班を組織し，本学内外の研究者の協力を得て継続して研究をすすめている。

時代順に述べれば，考古学，古代史学の分野では，松丸は本研究所蔵の甲骨資料の整理分析をおこない，甲骨を綴合の上で分類し，2,103 片の写真と拓本を『甲骨文字　図版編』として刊行し，その釈文の作成と研究にあたっている。また国内外の殷周青銅器を実物について調査し，近年までに蒐集した金文の写真資料のうち殷・西周のものの分類目録を刊行した。これらの基礎的作業を通じて，甲骨・金文の解釈や偽作問題につき新見解を発表し，その成果にもとづいて殷周時代の国家と社会構造を考究している。

谷は東アジアの考古学を専攻し，古代東アジア諸地域の文化の地方差と相互の影響について研究している。特に最近は日本国内所蔵の考古資料を整理しながら，楽浪郡を中心とした西暦紀元前後の東北アジア諸地域の歴史研究をすすめている。

池田は中国古代・中世史と東アジア前近代の文化交流史を研究し，唐代に

至る現存籍帳を集めて検討し，『中国古代籍帳研究』を刊行した。また文書が多く発見されている敦煌・吐魯番の社会の歴史研究，および仁井田陞『唐令拾遺』の増補のため編纂作業を進めている。又笹山晴生を代表とする『続日本紀』の注釈の共同研究にも中国文献との関連の面から協力している。

斯波は宋元明清中国の研究を進めており，商業史・水利史・都市問題・市場問題など社会経済史並びに地域社会史の分野を解明している。また，華人移住史に関して，長崎・函館・香港・台湾・オーストラリアなどの現地調査をもおこなった。その成果の一部に『函館華僑関係資料集』などがある。

明清以後現代に及ぶ問題については，上田は明清時代の社会史を専攻し，とくに江南社会の実態に迫るため，浙江省山間部を例として地域社会の定住経過，人口移動，宗族関係の変化などを細かく分析し，それを通じて地域史研究に新生面をひらきつつある。上田は南京大学歴史系に2年間留学した。このように若い研究者が長期にわたり現地の大学に留学できるようになったことは，日本の学界の今後の進展に貢献するところ少くないであろう。

濱下は19世紀を中心とする中国と欧米の経済関係の研究に従事し，海関資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき，貿易および金融問題の研究をすすめている。これに関連して，華人資本の海外活動の究明のため，香港・シンガポールなどで金融機関・商会の実地調査を実施した。また『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集』を共編したほか，本研究所蔵の清代・民国初期地主文書の整理分析作業を継続しておこなっている。

久保は民国時代の経済史を専攻し，とくに財政，関税，幣制，労働問題などにつき統計資料の分析を進め，国民政府による関税政策決定過程について考察したほか，『中外経済周刊』『経済半月刊』『工商半月刊』『国際貿易導報』『中行月刊』5誌の記事目録を共編した。

宮嶌は朝鮮近代史を専攻し，土地調査事業を中心とした社会経済史の研究を進めている。まず土地調査事業の実態に関する基礎的な研究をおこなうとともに，朝鮮史の時間的ひろがりの中でその意義を明らかにすべく，李朝時

代の農業史や植民地期の地主制について考察し，さらに他の植民地・従属地域における土地変革との比較を通じて，土地調査事業を空間的ひろがりの中で位置づけることをめざしている。

東アジア部門（第二）

鎌田茂雄　蜂屋邦夫　吉田　純　尾上兼英
田仲一成　大木　康　戸田禎佑

東アジア第二部門は，中国を中心とする東アジア地域の思想，宗教，美術を研究対象とする部門で，とくに「庶民文化の形成と展開」を研究課題として，各分野にわたって綜合的に研究することを目的としている。

一般に中国では，権力エリートと文化エリートは分離せずに癒着しており，したがって権力エリートは文化を独占して，庶民は非文化的階層とみなされてきた。庶民は文化の獲得の努力を繰り返しておこない，権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは非正統的な文化とみなされ，同時に強く意識されなかったにせよ，そこには反権力的な指向をもっていた。これは中国文化のひとつの特質といえようが，その状況はかなり複雑である。「庶民文化」は六朝期から唐末までに形成され，宋元以後にはめざましく発展し各地方に広がっていったと考えられる。この課題に対して，各研究分野で独自の問題の検討を通じて考究し，共同して中国文化の特質の解明をめざしている。以下各分野の研究について述べる。

宗教・思想研究分野では，鎌田は中国仏教史の綜合的理解をめざし，仏教の伝来から中国的仏教の成立に至るまでの歴史について，儒学・道教との関係，庶民信仰と儀礼の面から再検討を加え，ついで隋唐仏教の研究をすすめている。それと同時に，中国仏教の実態の理解のため，中国・香港などの仏

教寺院を継続して調査している。また韓国の仏教寺院についても調査をおこない，従来等閑視されてきた朝鮮仏教の重要性を明らかにして，その歴史を研究している。

蜂屋は六朝期を中心として儒仏道三教の思想とその間の交渉を研究している。思想の内在的理解のため文献の正確な読解に努めながら，とくに東晋時代の孫綽，戴逵，王坦之などの思想を検討し，また，全真教などの道教資料を通じて庶民の側の思想についても考察している。さらに本学内外の専門家の参加を得て，『儀禮疏』の研究を推進し，「士冠疏」3巻，「士昏疏」3巻の訳注を完成した。

吉田は85年4月入所以来，清代学術を主な関心の対象に研究を続けている。単に中国語音韻学，中国文字学などへの関心から，清朝考証学のそれらの分野における諸業績の内容の個々に対して論評を加えるような作業を繰り返すのに留まらず，やや巨視的に，その清代学術の全体を中国思想史，中国精神文化史の一環として捉える立場にたち，さしあたり段玉裁など清朝中期の古典学者達を対象に研究を進めている。

次に文学の分野では，古来，稗官小説流として蔑視された民間文学はエリートの正統文学に対立して存在していたが，六朝期以後，説話，歌謡などのジャンルを分岐させつつ，権力批判的指向の強い文学を形成していった。この流れは唐宋以後，質的には正統文学をむしろ凌ぐ勢で，戯曲・小説を展開させ，近世初期から近代に至る。文学研究分野ではこの展開過程を考察することを課題としている。

尾上は中国小説史を研究し，明清の白話小説の考察を中心に小説の源流をたどり，これと関連して明清以後の説書，説唱演芸の研究をすすめ，日本や東南アジアの華人社会の演芸・芸能の実態調査をもおこなっている。このほか，1930年代左翼文芸運動の総合的研究を所外の研究者とともに継続しておこなっている。

田仲は中国の地方演劇史を研究し，宋元より明清に至る地方演劇の記録を

詳細に調べ，中国の祭祀演劇の歴史を構成しようとしている。とくにこの数年来，香港，台湾，シンガポール，マレーシア等に見られる華南（閩粤）系演劇の調査を連続しておこない，文献資料との関連を考察している。また閩粤社会全体に視野を広げる必要から，他分野の専門家の協力を得て『華南の地域社会と地方文学』について綜合的な検討を試みている。

大木は尾上と同じく中国の小説史，芸能史を研究対象としているが，主として明清小説の社会的担い手の問題を追究している。さしあたり明末の文人馮夢竜の行なった白話小説や山村歌謡の採集・編纂の活動を手掛りとして，明清間の文人層と民間文学・民間芸能の関係を分析検討している。

美術史研究分野では，長年にわたって国内や欧米など諸外国に現存する中国絵画を調査し，その写真資料を蒐集してきた。それらの目録と図録とを刊行したので，その補足調査をおこなっている。戸田はこの基礎的作業を推進するとともに，宋元の羅漢十王図を中心とする仏画と元代道釈画を研究し，宋元絵画に表われた庶民的要素の意義を考察している。

南アジア部門

山崎利男　竹中千春　松井　透　柳澤　悠
加納啓良　土佐弘之　上村勝彦

南アジア部門は，東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人びとが複雑な社会を形成したうえ，欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て，戦後にあいついで独立した諸国からなる地域であるので，今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため，本部門は政治，経済，社会，文化などにわたって過去・現在の両者を綜合的に研究している。

本部門では，とくに「南アジアの伝統と社会変動および民衆意識」を課題として研究を進めてきた。このため，所外の研究者の協力を得て研究班を組織し，それぞれ新しい角度から問題を提起し，それについて実証的かつ理論的に検討をおこなっている。この研究の基礎的作業として，統計資料と法律資料の蒐集と整理，およびインド連邦政府・州政府刊行の調査報告書のリストの作成をすすめている。

政治・法律研究分野では，山崎はイギリスのインド植民地支配のもとでの法制度の樹立・発展について研究している。この研究は，イギリス側の立法経過，およびインド社会事情とインド人法律家・民族運動家などの対応を検討して，従来の法制史を再検討しようとするものである。またイギリス政府保管文書集を主たる資料としてインド・パキスタン分離独立の法的側面を考察し，独立後のインド憲法とヒンドゥー法の歴史についても独立前の問題と関連して考察している。竹中は両大戦間のインド政治について研究し，イギリスの支配体制に参加あるいは対立するインド諸政治組織の動態を分析し，英連邦史における「非植民地化」過程についても研究を進めている。

経済研究分野では，松井は19世紀後半から20世紀はじめにかけての北インドの経済史を研究し，詳細な統計資料から農業発展と農村生活の変化について考察を加えた。この研究では大量の統計データの処理が必要であり，その方法的基礎について検討した。この研究を拡大して，ガンジス流域での農業技術の進歩，農作物の商品化とその農村社会に与えた影響を研究している。イギリスのインド支配の理念についての研究から，さらに広く西欧のアジア社会の認識，アジア諸民族側の西欧文明の受容と反発などの諸問題を多角的に研究するため，班研究「近代世界におけるアジアとヨーロッパ」を推進している。

柳澤は，19世紀以後の南インド農村社会について，主として地税関係公文書を資料として土地所有と農村内諸階層の変化を中心に，検討してきた。近年南インドの一農村の現地調査をおこなったが，この農村を含む地区約

Ⅳ 研 究 活 動

100村の地税査定台帳は農民の経済生活の多くの面を記録しているので，その電算機による処理を試みるとともに，これと他の資料と合せて地域の経済と社会の変貌について研究している。

東南アジアに関しては，インドネシア等を中心に，官報，定期刊行物，統計など基礎資料の蒐集，整理を進めるとともに，各国間の相互比較の観点を踏まえた経済，政治，社会構造の研究を行なっている。

加納はインドネシアの経済を研究し，ジャワ農村の現地調査をふまえて，土地所有，農業労働，労働移動に焦点をおいて，ジャワの農業発展と社会変容を考察している。これと関連して，植民地時代のジャワの経済史についても研究をすすめ，植民地期の内務行政関係史料の書誌的整理作業をも行なった。

土佐は，インドネシア，フィリピンにおける経済開発の進行に伴う社会変動と政治体制の変容に関して，社会学的分析を進めている。

宗教・文化の分野では，上村がインド古典期の文化・社会・宗教を，それぞれ相互に密接に関連したものとしてとらえ，詩学を中心としたサンスクリット文学，アルタ・シャーストラ，インド神話に関する研究を発表してきた。目下，バラタに帰せられる演劇論書『ナーティヤ・シャーストラ』のラサ（美的経験）についての章，及びそれに対するアビナヴァグプタの難解な注釈書の全貌を解明し，それをまとめる作業に従事している。

西アジア部門

板垣雄三　　鈴木　董
松谷敏雄　　鎌田　繁

西アジア部門は，アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域，いわゆる中近東を研究対象とし，あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この地域の遠い過去から現在に及ぶ複雑な文化と社会を学際的研究によって把握することが本部門の目標である。

西アジア地域は，古代文明の発祥の地として，またその後の長い歴史過程における東西文化交流の結節点として，世界史上に重要な位置を占めてきた。同時に，世界の三大宗教と呼ばれるキリスト教，ユダヤ教，イスラム教などが生まれた地である。とくにイスラム教はこの地域を根幹とし，広く諸地域に滲透して多大な影響を及ぼしている。したがって，現在の世界の政治，経済，社会，文化にかかわる多角的な諸問題は，国際的見地からみても，とりわけ西アジア地域に現われているのである。本部門は以上の諸問題をいくつかの専門分野で共同に研究を推進している。

経済・政治の分野には，板垣と鈴木が所属している。板垣はアラブ近代史に関して従来おこなってきた研究を踏まえつつ，現代中東の政治・社会変動の機構を解明しようとする作業に従事してきた。そこでは，政治過程に作用する当該地域諸社会の集団編成原理ならびに価値意識の変化を重視し，また国際関係と社会過程との間の構造的連関に着目しながら，パレスティナ民族主義，イスラム復興運動などの展開について考察している。なお湾岸地域の社会変動を記述し分析するための指標の検討をもその一環としておこなっている。

また，鈴木はオスマン帝国史を専攻し，政治学的視点から帝国の政治・社会体制を研究した。とくに前近代における高級官人の変遷過程を分析して，

軍事・行政制度と高級官人を輩出する階層の変容の実態を明らかにするとともに，実務官人層の出現とその役割を論じた。また国際政治学の視点から，現代西アジアにおけるアイデンティティの変容と国際紛争について若干の考察をおこなった。

次に，歴史・考古の分野では，松谷が西アジアにおける農耕・牧畜という食料生産経済の開始に関して研究をしている。これは，昭和31年より本研究所が主宰してきた「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」の現地研究を引き継ぐものであり，両国における発掘調査をふまえ，近年の国際情勢の変化に伴ない，イラクに隣接するシリアへフィールドを移し，実証的に考究しようとするものである。

宗教・文化の分野では，鎌田がイスラムの宗教思想研究に携り，前近代の伝統的イスラムにおける神秘家の思想的営みに焦点をあてて個々の問題を論じてきた。イスラムの伝統的思想家の思索の枠組を把握しその特質を明らかにすることを目指して，イラン・シーア派（十二イマーム派）の神秘主義的哲学者モッラー・サドラーの霊魂観及び世界観を明らかにしようと努めている。

B　昭和61年度研究計画

〔部門研究〕

汎アジア部門　　アジア諸地域における社会・文化の変容過程

Ⅰ．アジア諸社会の固有文化とその変容

1.　中根　千枝　　チベット社会の統合とその変容過程

2.　松谷　敏雄　　アジアの先史時代における農耕村落の研究

3.　関本　照夫　　インドネシア社会の統合過程

4.　川崎　有三　　東南アジアにおける中国系社会の研究

Ⅱ．アジア諸国経済発展の比較研究

5.　山田　三郎　　アジア農業発展の国際比較

6.　原　洋之介　　アジア諸国の工業化と国際貿易

Ⅲ．アジアにおける政治変動と国際関係

7.　関　　寛治　　アジア太平洋地域の発展理論

8.　猪口　　孝　　西太平洋諸国における政治経済変動と対外政策

Ⅳ．アジアにおける都市と農村

9.　友杉　　孝　　日本とタイとスリランカの比較研究

東アジア部門(第一)　　東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1.　松丸　道雄　　中国古代国家の形成

2.　谷　　豊信　　東北アジア諸地域の国家形成

3.　池田　　温　　東アジア前近代国制の比較史

4.　斯波　義信　　宋元時代の社会経済構造

5.　上田　　信　　明清時代の社会経済構造

6. 濱下　武志　　中国近代の経済発展
7. 久保　　亨　　民国時代の社会経済構造
8. 宮嶌　博史　　近代朝鮮の社会経済構造

東アジア部門(第二)　　東アジアにおける庶民文化の形成と展開

9. 鎌田　茂雄　　庶民信仰の宗教形態
10. 蜂屋　邦夫　　庶民における三教思想の受容
11. 尾上　兼英　　明清の説書・説唱演芸
12. 田仲　一成　　明清の地方劇
13. 大木　　康　　明清の芸能・小説
14. 戸田　禎佑　　宋元の民間画工
15. 吉田　　純　　明清の儒学

南アジア部門　　南アジアにおける支配体制と社会構造

1. 上村　勝彦　　古代インドの文学と社会
2. 山崎　利男　　古代インド社会の変貌
3. 柳澤　　悠　　近現代インドの経済構造
4. 竹中　千春　　近現代インドの政治構造
5. 松井　　透　　イギリス植民地支配と南アジア社会
6. 加納　啓良　　インドネシアにおける植民地支配と農業問題
7. 山田　三郎　　東南アジア農業社会の比較研究
8. 原　洋之介　　東南アジアの支配体制と経済発展
9. 土佐　弘之　　東南アジアの社会変動と権力構造

西アジア部門　　西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1. 板垣　雄三　　イスラム国家論
2. 松谷　敏雄　　北シリアにおける農耕・牧畜の起源について

3. 鈴木　董　オスマン帝国の政治社会史的研究
4. 鎌田　繁　イスラム神秘思想の構造と展開

〔班　研　究〕

アジア諸社会における伝統的社会組織とその変容過程

主任　中　根

1. 中根　千枝　中国西北部蔵族社会の変容過程
2. 関本　照夫　ジャワにおける儀礼的集合の構造と政治的統合の過程
3. 末成　道男　台湾原住民と漢人の接触過程
4. 川崎　有三　マレーシア中国系社会における文化変容
5. 清水　展　フィリピン・ネグリートの社会経済変容
6. 船曳　建夫　ヴァヌアツ内部の社会・文化の基礎的単位の存在様態と序列化
7. 富澤　寿勇　伝統的マレー王権の現代的展開
8. 栗田　博之　パプアニューギニア・ファス族のロングハウス・コミュニティーの変容過程

アジア農村の現地研究の方法と過程

主任　友　杉

1. 宮口　侗廸　山村の構造—日本—
2. 友杉　孝　むらと水利—タイ—
3. 堀井　健三　米作農村と土地所有—マレーシア—
4. 茨口　善美　村落と農業—インド，バングラデシュ—
5. 中村　尚司　共同体と水利—スリランカ—
6. 後藤　晃　灌漑農業論—西アジア—

Ⅳ 研 究 活 動

アジアにおける農村開発と農村工業

主任　山　田

1. 山田　三郎　　アジアにおける農業開発と農村工業の展開
2. 原　洋之介　　東南アジア諸国の農村工業
3. 藤田　夏樹　　アジア農村における労働市場の構造
4. 本台　　進　　アジアにおける農村開発と部門間資源移動
5. 米倉　　等　　インドネシアの農村開発と農村工業
6. 南　　亮進
7. 牧野　文夫　　日本の戦前期農村電化とその経済的意義
8. 清川　雪彦
9. 大野　昭彦　　季節労働市場としての農村工業の意義—インドの場合を中心として—

東アジア・東南アジア政治体制比較

主任　猪　口

1. 猪口　　孝　　東アジア・東南アジア政治体制比較
2. 徳田　教之　　中国の政治構造
3. 石井　　明　　中国の内政と外交
4. 国分　良成　　中国の政治過程
5. 若林　正丈　　台湾の社会と政治
6. 古田　元夫　　ベトナムの民族と政治
7. 白石　昌也　　ベトナムの国家と社会
8. 小此木政夫　　朝鮮半島の政治外交過程
9. 伊豆見　元　　韓国の政治過程
10. 土佐　弘之　　フィリピンの経済と社会

アジアにおけるエリート構造の変容と国内・国際政治

主任　関

1. 関　　寛治　　エリート構造の変容とインド洋地域の開発と紛争
2. 石田千代子　　エリート・システムの情報検索と国際発展のシミュレーション
3. 板垣　雄三　　イスラム社会運動と国際政治
4. 高柳　先男　　ヨーロッパとアジアにおける安全保障の比較研究
5. 藤井　昇三　　中国における軍部と政治
6. 森山　茂徳　　東北アジアの国際環境と日韓関係
7. 竹中　千春　　インドにおけるデモクラシーと社会変革
8. 鈴木　　董　　トルコのエリート構造
9. 秦　　郁彦　　アジア諸国の比較エリート構造論

植民地体制と農業の商業化

主任　松　井

1. 濱下　武志　　中国
2. 宮嶌　博史　　朝鮮
3. 加納　啓良　　インドネシア
4. 原　洋之介　　タイ・マレーシア
5. 松井　　透　　北インド・ビルマ
6. 柳澤　　悠　　南インド
7. 友杉　　孝　　スリランカ
8. 加藤　　博　　エジプト

殷周時代の文物とその社会構造

主任　松　丸

1. 松丸　道雄　　殷周青銅器の製作事情とその国家構造
2. 持井　康孝　　窖蔵青銅器から見た殷周時代の社会構造
3. 飯島　武次　　殷周時代の玉器と青銅器との関わり

4. 量　博満　　倣銅土器製作の社会的背景
5. 豊田　久　　殷周出土文字資料から見た君主権の構造
6. 後藤　均平　　殷周時代の出土遺物と都邑
7. 平勢　隆郎　　殷文化と楚文化
8. 谷　豊信　　殷周文化と東北古代文化
9. 小倉　芳彦　　新出竹帛書と古典

六朝思想の総合的研究

主任　蜂　屋

1. 蜂屋　邦夫　　六朝における儒家思想
2. 戸川　芳郎　　経典解釈史からみた六朝義疏
3. 影山　輝国　　六朝における経学の展開
4. 吉田　純　　六朝時代の経典解釈学
5. 松岡　栄志　　六朝の伝統思想と文学思想
6. 澤田多喜男　　六朝における道家思想の展開
7. 高橋　忠彦　　道教思想の形成過程
8. 丘山　新　　仏典の翻訳と伝統思想
9. 末木文美士　　六朝思想に与えた仏教の影響
10. 菅野　博史　　六朝思想における仏性思想
11. 坂元ひろ子　　伝統思想と仏教
12. 杉村　邦彦　　六朝における書論の思想
13. 藤本　幸夫　　朝鮮文献よりみた中国伝統思想

中国仏教思想の形成過程

主任　鎌　田

1. 蜂屋　邦夫　　形成期の中国仏教思想
2. 福井　文雅　　道教思想の形成と仏教

3. 平井　俊栄　　三論思想の形成過程
4. 池田　魯参　　天台思想の形成過程
5. 鎌田　茂雄　　唐代仏教史の諸問題
6. 江島　恵教　　中観思想の中国的変異
7. 袴谷　憲昭　　唯識思想の中国的変異
8. 木村　清孝　　華厳思想の形成過程
9. 吉津　宜英　　華厳と禅との交流
10. 石井　修道　　禅思想の形成過程

東アジア前近代官僚制の研究

主任　池　田

1. 太田　幸男　　秦漢官吏支配の形成
2. 福井　重雅　　漢代官吏登用制度の形成と構造
3. 工藤　元男　　秦漢官僚制の構造
4. 尾形　　勇　　中国古代国家構造と官人支配
5. 池田　　温　　隋唐官人制の構造と特質
6. 岡野　　誠　　中国律令と官僚支配
7. 佐竹　靖彦　　宋元時代の官僚制度
8. 小口　彦太　　中国伝統官僚制の解体
9. 西澤奈津子　　職員令の構成と性格
10. 高塩　　博　　日本律令官人の法制と特質
11. 石上　英一　　日本律令官制の形成と展開

華南の地域社会と地方文学

主任　田　仲

1. 尾上　兼英　　広東の民謡(木魚書)
2. 斯波　義信　　閩粤発展の地域構造

3. 田仲　一成　　広東の演劇(粤劇，潮劇，恵劇)
4. 濱下　武志　　広東の経済と地域社会
5. 大木　　康　　蘇浙の説唱
6. 平山　久雄　　閩粤の言語
7. 王　崧　興　　閩粤の習俗
8. 大里　浩秋　　閩粤の秘密結社
9. 片山　　剛　　広東の村落
10. 戸倉　英美　　広東の民謡(山歌)と民話
11. 西川喜久子　　広東の宗族

17 世紀以降東アジア公私文書の総合的研究

主任　濱　下

1. 濱下　武志　　17 世紀以降東アジア経済の展開—欧米の公私文書分析を含めて—
2. 岸本　美緒　　明清期経済の動態と意識の構造
3. 上田　　信　　明清契約文書より見た社会関係
4. 寺田　浩明　　明清期の契約法慣習の論理
5. 臼井佐知子　　清末契約文書の社会経済史的分析
6. リンダ・グローヴ　民国時代公私文書より見た農村経済
7. 久保　　亨　　民国時代公私文書より見た経済構造
8. 宮嶌　博史　　朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討と国内国外に於ける補足的調査

主任　戸　田

1. 戸田　禎佑
2. 海老根聡郎
3. 嶋田　英誠

4. 関口　正之
5. 湊　信幸
6. 柳澤　孝
7. 小川　裕充
8. 宮崎　法子

特に専門別の分担を定めず，本年は仏画に関する検討，調査を重点的に行なう。

1930年代左翼文芸運動

主任　尾　上

1. 尾上　兼英　左翼文芸運動における民間形式の発掘と継承
2. 芦田　肇　日本プロレタリア文芸理論と左翼文芸運動
3. 伊藤　虎丸　左翼文芸運動と郁達夫
4. 尾崎　文昭　北京文壇からみた上海の左翼文芸運動
5. 近藤　龍哉　左翼作家連盟東京支部
6. 佐治　俊彦　左翼作家連盟に影響をあたえた諸思潮
7. 丸山　昇　30年代左翼文芸運動における魯迅
8. 溝口　雄三　左翼文芸運動の思想史的背景

朝鮮における社会変動と民衆—李朝期から近代まで—

主任　宮　嶌

1. 武田　幸男　李朝後期の身分制とその変動
2. 吉田　光男　李朝戸籍を通じてみた社会変動
3. 吉野　誠　李朝後期の国家財政と社会変動
4. 山内　弘一　李朝後期の地方財政
5. 鶴園　裕　李朝後期における在地支配の変動
6. 小川　晴久　ソンビと実学
7. 姜　東　鎮　「明治」期日本言論界の朝鮮問題論
8. 梶村　秀樹　1910年代の社会経済変動

9. 宮嶌　博史　土地調査事業と農村構造の変動
10. 尹　健　次　朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識
11. 馬淵　貞利　近代朝鮮農村の変容相
12. 宮田　節子　1920年代の地方支配と府・面協議会
13. 姜　徳　相　独立運動における社会主義と民族主義

南アジアにおける社会構造と伝統文化

主任　柳　澤

1. 山崎　利男　北インドにおける社会構造と法
2. 辛島　　昇　南インドにおける社会構造と文化
3. 松井　　透　北インドにおける社会構造と農業技術
4. 長崎　暢子　北インドにおける民衆意識と政治的行動
5. 中里　成章　ベンガル農村における経済変動と下層民衆
6. 柳澤　　悠　南インド農村における社会変動と下層民衆
7. 奥平　龍二　ビルマの国家と伝統法
8. 石井　米雄　タイの民族形成と伝統文化
9. 井東　　猛　インドネシアの諸国家と伝統文化

南アジアにおける社会変動と民衆意識

主任　加　納

1. 加納　啓良　インドネシアの社会変動と農村構造
2. 土佐　弘之　フィリピン・インドネシアの経済開発と都市民衆
3. 古田　元夫　ベトナムにおける社会階層と民衆意識
4. 白石　昌也　ベトナム農村社会の変動と民族形成
5. 友杉　　孝　タイの社会変動と民衆意識
6. 末廣　　昭　タイにおける資本蓄積と社会階層
7. 古賀　正則　北インドにおける経済変動と下層民衆

8. 佐藤　宏　北インド米作地帯の経済変動と農民生活
9. 竹中　千春　近代インドの政治と民衆
10. 中村　平次　インド亜大陸における諸民族形成

アジア都市比較の課題と方法

主任　友　杉

1. 陣内　秀信　江戸・東京の都市空間の特質
2. 友杉　孝　タイ・スリランカの地方商業都市
3. 坂本　勉　近代イラン・トルコ都市の比較
4. 鈴木　董　近世トルコの都市
5. 本村　凌二　古代地中海都市の特質

近代世界におけるアジアとヨーロッパ

主任　松　井

1. 濱下　武志　銀流通より見たヨーロッパとアジア
2. 川北　稔　イギリス工業化前史とアジア
3. 山口　博一　イギリス帝国におけるエリート養成政策
4. 宮嶌　博史　植民地支配における日本とイギリス
5. 小西　鮎子　フランス人の中国観
6. 岡本　サエ　中国人のヨーロッパ観
7. 土屋　健治　インドネシアにおける西欧思想とナショナリズム
8. 石井　米雄　タイにおける知識人の西欧思想受容
9. 山崎　利男　インドにおける伝統と植民地法
10. 松井　透　イギリス人の世界理解とインド支配
11. 鈴木　董　ヨーロッパにおけるオスマントルコ観の変遷

Ⅳ 研 究 活 動

アジアのイスラム

主任　板　垣

1. 板垣　雄三　　現代のイスラム国家論
2. 松谷　敏雄　　西アジアの基層文化
3. 中村廣治郎　　中世イスラムと政治
4. 佐藤　次高　　イスラム社会経済研究
5. 鈴木　　董　　トルコ・イスラム社会の研究
6. 鎌田　　繁　　イラン伝統文化における宗教思想
7. 加納　啓良　　ジャワ農村のイスラム
8. 加藤　　博　　近代エジプトの農村社会研究
9. 小田　淑子　　初期イスラム社会における法

アジアの宗教制度と儀礼

主任　山　崎

1. 鎌田　茂雄　　華人社会における仏教儀礼と習俗
2. 田仲　一成　　道教儀礼と演劇
3. 中根　千枝　　チベット社会における僧院の役割
4. 山崎　利男　　ヒンドゥー寺院の財産管理
5. 鎌田　　繁　　イスラム神秘主義における儀礼

C　定例研究会

昭和60年度定例研究会

6月20日　(西アジア部門)

報　　告　　部門の研究概況　　松谷敏雄

研究発表　　イスラーム神秘主義のグノーシス的背景　　鎌田繁

——モッラー・サドラーの思想をめぐって——

17世紀初頭のサファーヴィー朝イランにあって，シーア派神秘思想家として一時代を劃したモッラー・サドラーをめぐり，とくにその著書「真知をもつ者たちの霊薬」を素材として，そこに現われたグノーシス的モチーフを論じた。イスラームの一神教的性格の故に古代グノーシス説に顕著な二元論的宇宙観の反宇宙的性格は薄められたとはいえ，救済的自己認識や啓示者・救済者の役割の強調などの点において，明らかにそこには古代グノーシス説的要素が認められる，とした。

討論の中においては，古代グノーシス説が影響を及ぼすにいたった経路(思想の授受という発想で考えられるかという問題を含む)，イスラームの信徒としての修業の影響の有無，イスラーム神秘主義の思想家たちの中におけるモッラー・サドラーの位置，その他西アジア宗教文化全般にふれる諸問題をめぐり質疑がかわされた。

討論　山崎利男

司会　鈴木董

10月17日　(東アジア部門Ⅱ)

報　　告　　部門の研究概況　　蜂屋邦夫

研究発表　六朝思想史を中心とする学術交流　蜂 屋 邦 夫

本年2月25日から3月26日まで，北京・西安・成都・武漢・上海の各地を歴訪，大学や研究機関などでのべ17回の座談会を開いた経験をふまえると，当核分野においても研究体制の整備が進み専門的研究が進んでいること，寺院などの現地調査が容易であり，盛んになってきていること，学生や若い研究者の間でも，玄学・道教・仏教などへの関心が高まっていること，等々の事情に鑑み，日本との交流の可能性が広がりつつある。日本の研究状況との端的な差異は，現代的観点から，悪い面を批判し，良い面を評価して現代に生かしていこうとの志向が，非常に強い点に見られる。地域による関心の向き方の違いもあり，たとえば西安の場合は仏教が，また成都の場合は道教が，主要な研究対象となっている。報告をめぐる討論のなかでは，現地調査の可能性がとりあげられ，「文革」期の研究断絶状況などについても触れられた。

討 論　鎌 田 茂 雄
司 会　蜂 屋 邦 夫

11月7日　（南アジア部門）

報　告　部門の研究概況　山 崎 利 男

研究発表　非植民地化とイギリス　竹 中 千 春
——第二次大戦後から印パ分離独立前夜まで——

報告のポイントは，インド・パキスタン地域並びに中東・パレスチナ地域の2つの地域の場合を例として，主にイギリスの側から，非植民地化過程の検討をすることに置かれた。従来の研究は主にインドなど独立した地域の側からの分析が中心であったが，イギリス帝国自体の側からの分析も同時に重視されるべきであり，それら両者の視角を結合することが重要である。Formalな帝国支配が貫徹していたインド・パキスタン地域の場合，外部からの働きかけも少なく，イギリス自身がかなり展望をもって非植民地化過程

に対応しえたが，それに対しInformalな統治という側面が強かった中東・パレスチナ地域の場合，外部からも様々な政治的影響をこうむり，イギリス自身，明確な展望を持ちえぬまま，非植民地化が進むことになった。

イギリスのこの時期の対外政策のひとつの特徴は，「帝国を維持してこそ経済復興が可能になる」という発想が，保守党・労働党の別を問わずにきわめて根強かった点にあり，そのことが，現状に適合的な政策の選択の幅を狭めた。

報告に対し，帝国の側からの分析を，地域の側からの分析とどう総合していくか，ビルマを比較の対象とすることが有効でないか，インド・パレスチナを比較した結果のメリットは何か，あるいは「非植民地化」という言葉自体の問題性など，が討議された。

討論　関　寛治
司会　柳澤　悠

11月21日　（東アジア部門Ⅰ）

報　告　部門の研究概況　池田　温

研究発表　楽浪土城址出土の土器　谷　豊信
——紀元前後の北部朝鮮の文化の一面——

報告は紀元前後における「中国」文化の「周辺」への波及，並びにそれと関連して生起した，「周辺」地域での国家形成過程を究明すべく，平壌市街西南の楽浪土城出土の土器を詳細に検討した。漢文化の地方色を考察する上でも，また南部朝鮮や日本の文化との関係を解明する上でも，北部朝鮮における漢代の遺跡は，きわめて重要な意味をもっている。今回の研究に際しては，住民の生活・技術や文化交流の理解にとって特に大切な土器の諸問題をとりあげた。スライドを活用しながら，軟質灰色土器・滑石混入土器・白色土器などのそれぞれについて胎土・器形・製作技法の特色を整理し，総じて，中国本土との関連が密接である一方，南部朝鮮への影響は間接的であったと結論

づけた。

報告に対し，研究史的な位置づけ，発掘状況，土器の製作技法等の諸点について質問が提出され，討論がすすめられた。

討 論　松 谷 敏 雄
司 会　宮 嶌 博 史

12月12日　（汎アジア部門）

報　告　部門の研究概況　中 根 千 枝

研究発表　儀礼的共食とジャワ農村経済　関 本 照 夫

「クリフォード・ギアツの経済学」(原洋之介氏の近著)の中に示された「非経済行為としての儀礼が，市場取引の基礎的条件を用意する」という理解をとりあげ，“経済的な現実”と“理念的な倫理秩序”との両者の関係把握にかかる問題として，文化人類学の立場から，異なった角度からの理解の途を提起した。無限定な互酬性・共同主義に貫かれた画一的・定型的な儀礼的共食としてのクンドリ(スラマタン)と，それとは対照的に非画一的・非定型的な規模であり，明確な贈与交換を伴った儀礼的共食としてのジャゴンという2つの事例は，いわば“儀礼”と“経済的現実”の両者の相互関係を，単線的な機能連鎖としてとらえることの限界を示している。両者の間にズレがあれば，それを単純に一元化したレベルでとらえず，むしろ異次元のズレとしてそのままとらえ，そこに社会生活が一定の安定性・一貫性をもつものとして可能になるものと考えるべきであろう。

報告をめぐる討論のなかでは，フィールド調査対象村の社会経済的実態や“市場経済”概念，“ジャワ”と呼ばれるものの実体などが討議され，さらに理念と現実のズレを地域・時間の変化のなかで如何に把握するかも問題となった。

討 論　友 杉 孝
司 会　山 田 三 郎

D　科学研究費による研究・特別事業費による現地研究

海外学術調査〔昭和59・60年度〕

○東南アジアにおける中国伝統芸能の総合的調査研究

（海外学術調査　現地調査）　代表者　尾上　兼英

1984年7月から9月にかけ，第3次本調査としてタイ・マレーシアを調査した。同行者は佐伯有一・田仲一成・濱下武志・増山賢治の4名である。

（海外学術調査　調査総括）　代表者　尾上　兼英

1979年の予備調査後，80年香港，82年シンガポール・マレーシア，84年タイ・マレーシアと現地調査を行なった結果を，『関於東南亜華人的伝統藝能』第三部泰・馬来西亜として刊行した。内容は戯曲・戯曲音楽・中之会祭祀行事・華人社団・庶民金融に関する各分担者の報告である。

○東南アジア米作農村経済の比較研究—タイとインドネシア—

（海外学術調査　調査総括）　代表者　山田　三郎

都市化，工業化の進展の中で，アジアの米作農村の社会や経済が如何なる変容を遂げつつあるのかを，現地調査によってタイとインドネシアにつき比較研究した。その結果，耕地に対する人口密度の差異がそうした変容の内容や程度を左右する重要なファクターであることが明らかになった。なお研究成果の一部を，山田三郎・原洋之介・加納啓良・田中学・福井清一著『中部タイ稲作農村の経済変容』（東洋文化研究所叢刊第7輯，昭和61年）として刊行した。

○ラブラン寺ならびにその周辺の蔵族・漢族のコミュニティの研究

（海外学術調査　予備調査）　代表者　中根　千枝

中国における地域社会の研究を目ざすもので，その可能性の打診と，中根の従来の研究フィールドである甘粛省蔵族・漢族地帯の特別許可が出たため，チベット六大寺のひとつであるラブラン寺ならびにその周辺の蔵族・漢族のコミュニティを調査した。本調査は昭和62年度となる予定である。

○西アジア先史遺跡調査

（海外学術調査　予備調査）　代表者　松谷　敏雄

本研究所では，昭和31年からイラクとイランにおいて考古学的・美術史学的調査を実施してきたが，近年の国際情勢の変化によって両国での現地研究が困難になってきた。そのため，シリアで発掘調査をすることに計画を変更し，遺跡の選定を目的として，昭和60年の夏休みに現地へ赴いた。幸い目的にかなう遺跡を選び出すことができ，当局との接衝により正式の調査許可を得た。本調査は昭和62年から隔年で3回行なう予定である。

一般研究

○中国契約文書及び私文書の歴史的研究

（一般研究B）（昭和58・59・60年度）　代表者　池田　　温

東文研所蔵清代・民国期文書の補修・撮影・整理及び研究等を進め，最終年度に上田信「中国清代江南土地用語簡釈」・濱下武志「清末，民国期華中に於ける合股・合夥契約文書」・久保亨「中華民国期文書史料の紹介と検討」・宮嶌博史「植民地期朝鮮の小作契約文書」・池田温「中国古代契約文書の整理」

を含む報告書を刊行した。

○経済利益の政治的表現の実証研究

（一般研究B）（昭和60・61・62年度）　代表者　猪口　　孝

経済利益がどのような形で政治的に表現されているかを，国会議員のキャリア分析や意見調査によって明らかにする。

○インドネシア経済史の基礎史料およびデータの整理研究

（一般研究C）（昭和59・60年度）　代表者　加納　啓良

表記のテーマにそって研究を進め，以下のような成果を得た。

①『内務行政雑誌』（*Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur*, 53 Vols., 1888—1917）所収の全論文，記事についての主題別，著者別分類目録の作成。

②蘭印政府内務省地方官の『転任時覚え書き』（*Memorie van ovegave*）などの基本史料の整理。

③諸種の統計資料にもとづくデータ・ファイルの作成と，それにもとづく若干の分析。とくに，1920年代のジャワ糖業の資本系列の解明。

〔特別事業費による現地研究〕（昭和59・60年度）

○蜂屋邦夫

1985年2月25日から3月26日にいたる1ケ月間，北京など5都市を訪問し，各地の研究機関の学者たちと，六朝思想史を中心課題として学術討論をおこなった。

○尾上兼英

1986年3月から4月にかけ，香港経由で厦門・泉州，福州，上海・蘇州における説書・説唱演芸の調査をおこなった。

○松谷敏雄

昭和62年度にシリアにおいて現地調査を計画しているので，その研究準備のため，昭和61年3月18日より4月4日まで，シリア・トルコ両国へ赴いた。シリアでは当局との接衝，トルコでは在イスタンブール・オランダ考古学研究所での討論が主たる目的である。

E　本学内教育参加

〔昭和59年度追加〕

全学一般教育ゼミナール

（氏　名）		（講義題目）
鈴木助教授	第2・4学期	オスマン帝国の近代化

〔昭和60年度〕

1.　大　学　院

（氏　名）	（専門課程）	（講義題目）
（1）　人文科学研究科		
尾上教授	中国語中国文学	説唱文学研究
田仲教授	中国語中国文学	西廂記
池田教授	東洋史学	吐魯番文書研究
濱下助教授	東洋史学	中国近代経済史研究
宮嶌助教授	東洋史学	近代朝鮮経済史研究
山崎教授	東洋史学	インド法制史研究
蜂屋助教授	中国哲学	西晋時代の思想
鎌田教授	印度哲学印度文学	中国仏教文献講読
鎌田助教授	宗教学宗教史学(イスラム学)	イスラム思想文献研究
戸田教授	美術史学	中国絵画史研究
（2）　法学政治学研究科		
関　教授	政治学	アジア太平洋圏の発展理論研究
猪口助教授	政治学	政治分析
鈴木助教授	政治学	近代トルコ政治史研究

（3） 社会学研究科

中 根 教 授	文化人類学	社会構造の分析
松 谷 教 授	文化人類学	メソポタミア先史学
松 井 教 授	国際関係論	歴史における数量的方法
加 納 助 教 授	国際関係論	東南アジアの経済と社会

（4） 総合文化研究科

松 谷 教 授	地域文化	アジア地域文化構造論他

（5） 理学系研究科

友 杉 教 授	地理学	地理学演習

（6） 農学系研究科

山 田 教 授	農業経済学	国際農業論特殊研究
原 助 教 授	農業経済学	国際農業論特殊研究

2. 学部

（氏 名）	（学 科）	（講義題目）
（1） 文学部		
中 根 教 授	一般講義	文化人類学
戸 田 教 授	美術史学	美術史学特殊講義
柳 澤 助 教 授	東洋史学	東洋史学特殊講義
（2） 法学部		
山 崎 教 授		比較法原論 B（インド法）
（3） 教養学部		
中 根 教 授	教養学科	社会の構造・文化人類学方法論
松 井 教 授	教養学科	世界市場形成研究
山 田 教 授	教養学科	経済発展
松 谷 教 授	教養学科	技術発達史
鈴 木 助 教 授	教養学科	トルコ政治史

猪口助教授	一般教育	政治学

（4） 農学部

原　助教授	農業経済	比較農業

（5） 全学一般教育ゼミナール

山崎教授	第1・3学期	インドと日本
鎌田助教授	第2・4学期	イスラム宗教思想

〔昭和61年度〕

1. 大学院

（氏　名）	（専門課程）	（講義題目）
（1） 人文科学研究科		
尾上教授	中国語中国文学	説唱文学研究
田仲教授	中国語中国文学	西廂記
池田教授	東洋史学	中国古代寺院文書研究
濱下助教授	東洋史学	中国近代経済史研究
松丸教授	東洋史学	殷周青銅器銘文研究
宮嶌助教授	東洋史学	近代朝鮮経済史研究
山崎教授	東洋史学	インド法制史研究
蜂屋助教授	中国哲学	東晋時代思想資料講読
鎌田教授	印度哲学印度文学	中国仏教文献講読
上村助教授	印度哲学印度文学	Nāṭyaśāstra 研究
鎌田助教授	宗教学宗教史学（イスラム学）	イスラム思想文献研究
板垣教授	宗教学宗教史学（イスラム学）	現代イスラムをめぐる諸問題
戸田教授	美術史学	中国絵画史研究
（2） 法学政治学研究科		
関　教授	政治学	政治発展と国家
猪口助教授	政治学	政治分析

鈴木助教授	政治学	近代トルコ政治史の諸問題

（3） 社会学研究科

中根教授	文化人類学	社会構造の分析
松谷教授	文化人類学	メソポタミア先史学
松井教授	国際関係論	歴史における数量的方法
加納助教授	国際関係論	東南アジアの経済と社会

（4） 経済学研究科

加納助教授	経済史学	経済史専攻指導
柳澤助教授	応用経済学	インド経済論

（5） 総合文化研究科

松谷教授	地域文化研究	アジア地域文化構造論他
板垣教授	地域文化研究	アジア地域文化講造論他

（6） 理学系研究科

友杉教授	地理学	地誌研究

（7） 農学系研究科

山田教授	農業経済学	国際農業論特論
原助教授	農業経済学	国際農業論特論

2. 学部

（氏　名）	（学　科）	（講義題目）
（1） 文学部		
中根教授	一般講義	文化人類学
松井教授	東洋史学	東洋史学特殊講義
戸田教授	美術史学	美術史学特殊講義
鎌田助教授	イスラム学	イスラム学特殊講義
（2） 教養学部		
中根教授	教養学科	社会の構造・親族の理論

松　井　教　授	教養学科	世界市場形成研究
松　谷　教　授	教養学科	文化の動態・先史時代の世界史
原　　助教授	教養学科	経済発展
鈴木助教授	教養学科	中東国際関係
猪口助教授	総合科目	意味と情報

（3）　理学部

友　杉　教　授		地理学特別講義Ⅱ

（4）　全学一般教育ゼミナール

宮嶌助教授	第1・3学期	朝鮮史

F　外国出張（昭和59・60年度）

氏　名	出張先	期　間	目　的
加藤　博	エジプト	57.12.10～59. 9.30	近代エジプト社会経済史研究
上田　信	中国	58. 9.10～60. 7.31	明清期江南地域における地域社会構造の研究
猪口　孝	米国	58.12.12～59. 9.30	先進工業国の政治経済問題（特に国際問題）に関する調査研究
福井　清一	タイ	59. 3.12～59. 4.15	タイ稲作農村における農業経済学に関する実態調査
久保　亨	中国	59. 4. 2～59.12.31	中国資本主義発展史の研究
大野　盛雄	イラン	59. 4. 5～59. 5. 8	イラン農村の実態調査
田仲　一成	香港	59. 4.22～59. 4.29	香港地方劇調査
中根　千枝	中国	59. 6.17～59. 7.14	ラブラン寺ならびにその周辺のチベット族・漢族のコミュニティの研究
鎌田　茂雄	中国	59. 6.22～59. 6.30	中国仏教に関する調査研究
田仲　一成	香港	59. 6.24～59. 6.30	香港地方劇調査
関　寛治	中国	59. 6.26～59. 6.29	日中民間人会議主催「アジアの発展と世界平和」シンポジウム出席
清水　展	米国	59. 7. 1～60. 3.31	文化人類学に関する調査研究
濱下　武志	タイ，マレーシア	59. 7. 5～59. 9. 9	東南アジアにおける中国伝統芸能の総合的調査研究
大野　盛雄	トルコ	59. 7.16～59. 9.20	イスラム圏における農村の社会経済構造の比較研究

尾上　兼英	タイ，マレーシア	59. 7.18～59. 9. 6	東南アジアにおける中国伝統芸能の総合的調査研究
鎌田　茂雄	韓国	59. 7.24～59. 7.29	国際仏教学術会議出席
田仲　一成	タイ，マレーシア	59. 7.26～59. 8.29	東南アジアにおける中国伝統芸能の総合的調査研究
原　洋之介	タイ	59. 8. 5～59. 8.26	タイ国における農村研究の現状調査
鎌田　茂雄	台湾，タイ，シンガポール	59. 8.11～59. 9. 9	中国仏教儀礼の研究
友杉　　孝	スリランカ，英国	59. 8.20～60. 1.20	東南アジアにおける地方都市社会の研究
原　洋之介	インドネシア	59. 9. 1～59. 9.14	農業経済学に関する調査研究
中根　千枝	ハンガリー，デンマーク，ユーゴスラビア	59. 9. 8～59. 9.23	チョーマ・デ・ケロス 200年祭シンポジウム出席及び社会人類学に関する調査研究
福井　清一	タイ，ネパール	59. 9.19～59.10. 6	農業経済学に関する調査研究及び資料収集
戸田　禎佑	中国	59. 9.30～59.10.14	中国所在中国絵画の調査研究
中根　千枝	米国	59.10.14～59.10.21	ケイス・モルデン記念講演会出席及び社会人類学に関する調査研究
関　　寛治	英国，米国	59.11. 3～59.11.15	「世界の危機と世界の変容」シンポジウム出席及び国際政治学に関する調査研究
松井　　透	中国	59.11. 5～59.11.20	南アジア研究・植民地研究に関する学術交流
山田　三郎	インドネシア	59.11.11～59.11.18	農業生産性計測に関するセミナー出席
鎌田　茂雄	台湾	59.11.25～59.12. 3	中国仏教儀礼の調査研究
福井　清一	タイ	59.12. 2～60. 2. 5	北タイ稲作農村における水利組織の実態調査
田仲　一成	香港	59.12. 7～59.12.17	香港地方劇調査

濱下 武志	香港	59.12. 9～59.12.26	香港における銀行史研究
鎌田 茂雄	韓国	59.12.11～59.12.14	仏教伝道会議出席
谷 豊信	米国	59.12.16～60. 1. 7	中国考古学に関する調査研究
山崎 利男	インド	60. 1. 3～60. 1.16	インド史に関する調査研究
松丸 道雄	オーストラリア，米国，カナダ	60. 2. 1～60.11.30	中国古代青銅器資料の蒐集と調査
蜂屋 邦夫	中国	60. 2.25～60. 3.26	中国六朝思想史・宗教史に関する調査研究
関 寛治	中国	60. 2.25～60. 2.28	朝鮮問題平和解決国際シンポジウム準備委員会出席
中根 千枝	インド，スイス，英国	60. 3. 6～60. 3.30	日印調査委員会合同会議及び熱帯病に関する研究・訓練に関する委員会出席並びに社会人類学に関する調査研究
濱下 武志	香港，フランス，オランダ，英国	60. 3.20～60. 6.15	中国近代史に関する調査研究
山田 三郎	マレーシア	60. 4.26～60. 5. 9	マレーシアにおける農村調査
関 寛治	ソ連，朝鮮民主主義人民共和国，中国	60. 4.26～60. 5.10	「朝鮮問題解決のための学術国際シンポジウム」打合せ及び「日本海・アジア平和の船」における講演
鈴木 董	トルコ	60. 5.12～60. 5.24	「伝統科学と近代科学—19世紀科学の日土比較研究—」ワークショップ出席及び西アジア歴史に関する研究調査
戸田 禎佑	米国	60. 5.18～60. 6. 2	メトロポリタン美術館クロフォード記念国際シンポジウム出席及び中国絵画に関する研究調査
鎌田 茂雄	中国	60. 6.20～60. 7. 5	中国仏教儀礼の研究
竹中 千春	英国	60. 7.13～60. 9. 8	インド近現代史に関する調査研究

関　寛治	フランス，英国，米国	60. 7.14～60. 8. 1	世界政治学会国際会議及び高度技術社会のリーダーシップ会議出席並びに国際政治学に関する調査研究
田仲　一成	香港	60. 7.14～60. 7.23	中国中世史国際会議出席及び地方劇に関する資料調査
池田　温	香港	60. 7.15～60. 7.20	中国中世史国際会議出席
原　洋之介	パキスタン	60. 7.19～60. 8. 3	経済協力計画策定のための基礎調査
中根　千枝	中国	60. 7.21～60. 8. 8	社会人類学に関する調査研究
松谷　敏雄	シリア	60. 7.22～60. 9. 5	西アジア先史遺跡調査
池田　温	中国	60. 8. 1～60. 8.15	中国敦煌吐魯番学術討論会出席及び東洋史に関する資料収集
関　寛治	ソ連，中国	60. 8. 9～60. 9. 6	不戦・非核・軍縮のためのシンポジウム出席及び比較政治学に関する調査研究
山田　三郎	フランス，スペイン，ブラジル，ペルー，オランダ	60. 8. 9～60.11. 8	国際農業経済学会出席及び農業発展比較研究
関　寛治	朝鮮民主主義人民共和国	60. 8.18～60. 8.30	国際政治に関する調査研究
鈴木　董	トルコ，英国，オランダ，ドイツ連邦共和国	60. 8.21～60. 9.16	日本・トルコ比較共同研究打ち合せ及びトルコ史に関する資料収集
谷　豊信	米国，カナダ	60. 8.25～60. 9.29	中国考古学関係資料の調査
中根　千枝	中国	60. 8.26～60. 9.28	社会人類学に関する調査研究
鎌田　茂雄	中国	60. 9. 1～60. 9. 9	中国仏教に関する調査研究
原　洋之介	タイ	60. 9. 8～60. 9.21	アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査
濱下　武志	香港，中国，米国，カナダ	60.10. 3～60.11.25	「林則徐誕生200年記念学術討論会」及び「第3

			回ソビエト・東欧研究世界大会」出席並びに中国経済史資料調査
戸田　禎佑	中国	60.10.11～60.10.27	中国絵画に関する調査研究
猪口　　孝	英国	60.10.12～60.10.17	国際セミナー「アジア・太平洋の将来」出席
中根　千枝	インド，ネパール	60.10.27～60.11.24	インド・ネパールにおけるチベット人コミュニティの調査研究
戸田　禎佑	台湾	60.11.11～60.11.18	中国絵画に関する調査研究
山田　三郎	インドネシア	60.11.17～60.11.24	インドネシアにおける農業生産性計測
田仲　一成	香港	60.11.18～60.12.31	「道教儀礼と音楽」国際会議出席及び農村演劇調査
濱下　武志	中国，香港	60.12. 6～60.12.26	中国対外関係史会議出席及び中国経済史に関する調査研究
久保　　亨	中国，香港	60.12.24～60.12.27	研究資料収集
谷　　豊信	米国	60.12.30～61. 1.12	カリフォルニア州所在の中国考古学関係資料の調査研究
原　洋之介	ビルマ	61. 1.26～61. 2. 4	ビルマ経済に関する現地調査
竹中　千春	フィリピン	61. 2. 4～61. 2. 8	マルコス体制に関するワークショップ出席
原　洋之介	インドネシア	61. 2.23～61. 3. 2	インドネシアにおける投資促進並びに企業環境改善に関する現地調査
中根　千枝	スイス，オランダ	61. 3.13～61. 3.28	STACの特別プログラムに対する第8回科学技術顧問会議及びISNAR第17回プログラム委員会出席
松谷　敏雄	シリア，トルコ	61. 3.18～61. 4. 4	シリアにおける遺跡発掘調査の予備調査

尾上　兼英	中国，香港	61. 3.21～61. 4.20	華南地方の伝統芸能に関する調査研究
関　　寛治	米国，英国，オーストリア	61. 3.25～61. 4.20	「米国国際政治学会」及び「国際平和研究学会総会」出席並びに国際政治学に関する調査研究
猪口　　孝	米国	61. 3.25～61. 3.29	国際研究学会（ISA）出席
猪口　　孝	英国	61. 3.31～61. 4. 7	日米会議「一党優位の比較研究」出席

G　外国人研究員等・内地研究員・奨励研究員
（昭和60年度）

〔外国人研究員等〕

氏名（国籍・現職）	期　間	研究課題	担当教官
Christopher T. NIEH（中国（台湾）　Johns Hopkins 大学博士課程）	59. 4. 1～61. 5.31	日本の対満州政策（1930年代）	関　　教　授
N. SHANMUGARATNAM（スリランカ　日本農業研究者）	59. 4.16～60. 4.15	日本農業・農村研究―新潟県月潟村の実態調査	友　杉　教　授
夏　應　元（中国　社会科学院歴史研究所副研究員）	59. 7. 1～60. 8. 5	中日関係史（前近代の経済関係中心）	池　田　教　授
都　珖　淳（韓国　漢陽大学教授）	59. 7.10～60. 7.10	韓国の伝統文化に作用した道教・仏教の役割と特質に関する研究	鎌　田　教　授
裵　英　淳（韓国　嶺南大学文科大助教授）	59. 9. 1～60. 8.31	日本帝国主義下の韓国における植民地的土地変革の構造	宮嶌助教授
卞　麟　錫（韓国　釜山産業大学教授）	59.12. 1～60.12.30	東アジア古代における韓・中・日の文化交流史	池　田　教　授
C.L.J. VAN DER MEER（オランダ　グロニンゲン大学経済学部助教授）	60. 3. 2～60. 4. 1	アジアとヨーロッパにおける農業発展の国際比較	山　田　教　授

Elsa Perez JURADO （フィリピン　フィリピン大学社会科学哲学部助教授）	60. 5. 1～61. 4. 30	フィリピンの工業化と日本の対フィピリン投資に関する政治経済学的研究	加納助教授
Lee W. FARNSWORTH （米国　ブリガムヤング大学教授）	60. 6. 12～60. 11. 30	日米関係に対する立法府の影響力	猪口助教授
呉　勝　國 （中国　社会科学院世界宗教研究所）	60. 7. 1～61. 3. 31	唐代における日中文化交流史	蜂屋助教授
金　正　起 （韓国　清州師範大学歴史教育科助教授）	60. 8. 25～61. 8. 24	朝鮮開港期日本の対朝鮮利権政策	宮嶌助教授
高嶋謙一 （米国　ブリティッシュコロンビア大学副教授）	60. 9. 1～61. 8. 31	英文による甲骨文字字典編纂	松丸教授
趙　全　勝 （中国　カリフォルニア大学政治学部助手）	60. 10. 1～61. 9. 30	日本の対中政策	猪口助教授

〔内地研究員〕

岡本サエ（千葉大学教養学部助教授）

研究課題　明清士人に関する比較思想研究

担当教官　田仲教授　期間 60. 9. 1～61. 2. 28

〔奨励研究員〕

栗田博之

研究課題　パプアニューギニア・ファス族の社会人類学的研究

担当教官　中根教授　期間 60. 4. 1～61. 3. 31